

東洋エクステリアが発信する環境情報誌

ICH BIN KEIN TERRORISTIN

# Nelsis

ネルシス

Vol. 9

21世紀のランドスケープ・エコロジー

特集

歴史を生かすまちづくり



## 都市と歴史の交差点



いま、壁の前でシャッターを切る二人は、「壁」の存在を知らない世代だ。それがベルリンの壁である以前に、私たちは歴史という「壁」の前で次第に過去を失ってゆく。

都市、あるいは二人の未来を語るために必要なものは何か。

それは時の積み重ねのさまざまな断層を提示し、善悪の押し付けではなく、

その隙間に向けて柔らかな思考を喚起させる装置ではないか。

ベルリンの壁の境界であったポツダム広場は、

かつて世界最多の交通量を誇る交差点であったが、その後、廃墟と化していた。

多くの人々の記憶が行き交うターミナルは高層建築を背景に復活を遂げたが、

それだけでは不十分とベルリナーは思う。

歓喜の歌は同時にレクイエム（鎮魂歌）でなくてはならない。

ベルリンには建築や広場、博物館など、多くの「記憶の都市」をテーマにする施設がある。

それが忌まわしい過去であっても、未来へ向けて都市と身体の遺伝子を結び付ける重要な役割を果たしている。

残された壁のモニュメントも静かに語り始めている。

シャッター音とともに、私たちは二人の歩みを見届けることができるだろうか。

文・写真……シヨバラ タク

### 02 [特集] 歴史を生かすまちづくり 21世紀のランドスケープ・エコロジー

- 04 [インタビュー] いま、なぜ「歴史」なのか……◆西村幸夫
- 07 「歴史まちづくり法」とはなにか……◆越澤 明
- 08 歴史と文化が積層した街・丸の内……◆写真/シヨバラ タク
- 10 創建当時の3階建てに「復原」される東京駅丸の内駅舎——JR東日本
- 12 変貌する丸の内界隈、三菱一号館の復元とまちづくり——三菱地所株式会社
- 14 3つの歴史的な広場再生を通じたマカオのまちづくり……◆八木祐三郎
- 20 街なか再生を実現するメインストリートプログラム手法……◆大谷昌夫

### 24 対談

ランドスケープアーキテクトの職能を考える……◆上山良子、三谷 徹

### 30 Product Message [プロダクト メッセージ/シェルター]

- りんくう人工海浜 (愛知県常滑市) ●検見川の浜 (千葉県千葉市) ●呉市立昭和中央小学校 (広島県呉市)
- 新横浜公園テニスコート (神奈川県横浜市) ●大仙市立協和小学校 (秋田県大仙市) ●駒大深沢キャンパス前バス停 (東京都世田谷区) ●名神高速吹田サービスエリア下り線 (大阪府吹田市) ●明石医療センター (兵庫県明石市) ●広島市立広島市民病院 (広島県広島市)

### 38 色に着目し、さらにやさしさを増した サポートレールUD〈カラーUDタイプ〉誕生

### 44 エクステリアの屋外展示場「KAP」グランドオープン

### 46 Project File [プロジェクトファイル]

- うみんびあ大飯 (福井県大飯郡) ●越谷レイクタウン (埼玉県越谷市) ●医療法人 郷の会 ところの郷クリニック (和歌山県橋本市) ●名古屋市立熊の前小学校 (愛知県名古屋)

### 54 TOEXのビジネスサイト紹介「ネルシスネット」

### 57 世界のストリートファニチャー ⑧

スペイン: グラナダ 軽やかに波打つ屋根のバス停





# 特集

取材・構成……編集部



写真はすべて石見銀山(島根県大田市)  
撮影:八木祐三郎

地方自治体や民間を問わず、その地域の「歴史的資産」を活用するまちづくりが盛んになっています。すでにある歴史的な建物を保存・活用したり、一度壊された歴史的建造物を復元するなどまちづくりに歴史的価値を付加するさまざまな試みが行われています。また、2008年5月に「歴史まちづくり法」が公布されたことで歴史を生かしたまちづくりの機運がさらに高まると期待されます。

# 歴史を生かす まちづくり

海外事例としては、世界遺産登録された

アジアで最もホットな都市・マカオのまちづくりについて報告します。

また、アメリカでは近年「メインストリートプログラム」という、NPOの活動による歴史的空間を保持しながらの街の再生が注目されています。

今回は「歴史」をキーワードに、まちづくりの新しい動きを紹介します。



# いま、なぜ「歴史」なのか

話し手……西村幸夫氏（東京大学教授）

平成20年5月に「歴史まちづくり法」が公布された。この新しい法律は規制中心だった歴史あるまちのまちづくりに一石を投じる画期的なものだといわれる。全国の歴史を生かしたまちづくりに深くかかわってこられた西村幸夫氏にまちづくりの「いま」をうかがった。

## 地形と歴史はまちづくりの基本

### 地域再生の手がかりを見つける

われわれ都市計画をやっている人間が「まち」を見るとき視点として、「歴史がどうなっているのか」「地形がどうなっているのか」という2点が基本になっています。高度成長期の日本はバブル崩壊で不況になるまで、この基本を忘れていた傾向にあり、そのことのほうが問題だと思います。最近ようやく、その基本に立ち戻ってきているということではないでしょうか。

これまでの地域づくりでは、過去を否定して、もっといいものができるという考えがあった。昔にくらべて「まち」はどんどんよくなり、新しく造るものはすべて優れているのだ、と。さまざまな制度は全部そうなっていると思います。技術も進んでいるし、そう考えている建築家も多い。しかし、右肩上がりの時代はそれでよかったかもしれないが、今は必ずしもそういう時代ではなくなってきた。

地方都市での大きな再開発は難しく、環境問題の視点からも、頻繁に「まち」を変えることは好ましくありません。すでにあるものを大事に使っていく、とりわけ、昔から残っているものはその地域の特色をつくっているわけですから、大事にしたいほうがいいのではないかと、考えるようになってきた。技術に沿えば画一化していきますが、地形や歴史にこだわれば、ほかにもものになります。個性を大事にする時代だからこそ、「歴史」が地域再生のひとつの大きな手がかりになると思います。

最近の若い人たちは歴史が大好きです。古い建物も好きです。歴史が嫌いなのは団塊の世代だけです。競争してがん

ばってやってきた彼らは、過去の人たちを否定して自分たちがいるという世代ですから。五十代、六十代の人は、歴史を大切にしようなのを造ったら若い人たちに受けないんじゃないかと言いますが、逆なんです。だから成功体験の強い団塊世代のある種の人たちがまちづくりをやると、ちょっと怖いことになる。若い人のほうが、ヒューマンスケールの古いものが落ち着けると評価し、そういう空間を大切に思っていますよ。

## 人々の合意形成で変わるまち

### 犬山城下町と石見銀山

最近携わっているまちづくりで、おもしろい動きをしているのは愛知県犬山市の犬山城下町です。犬山は1971年に都市計画決定された城下町の本町通線と新町線の16mの拡幅を、住民と行政で長期間にわたって議論した末、中止することに決めたのです。犬山城へ真っすぐに向かう6mくらいの道はそのままで、電柱の地下化と歩行者空間の整備が行われることになった。昔の城下町の骨格を守るという方針が決まると、お店がけっこう戻ってきたりするんです。10軒近い店がオープンして、観光客も増えているようです。これまでの観光客は、犬山城が国宝だからお城には上るけれど、まちは素通りして明治村に行ったりしていたわけですから、そういった変化がある。

歴史のあるまちというのは、昔から豊かな食文化をもっています。城下町には必ず有名な和菓子屋があり料亭があります。観光地としての魅力がもともと備わっている。そうした資源をうまく活用することで「まち」がよみがえっていきます。

2007年7月に世界遺産に登録された島根県大田市の石見銀山では、400台分の駐車場を3km離れたところに造り、そ

こから歩くか定期バスだったのですが、環境への影響を考慮して定期バスをやめ、電気で走るシャトルバスを運行するようになったそうです。そもそも駐車場の位置を決めるときも、そんなに離れたところでいいのかという議論があったのですが、多少不便でもそれをよしとするお客さんに来てもらいたいということになった。それと、私設の有料駐車場は造らないことに住民みんなが合意したそうです。これはなかなか、たいしたものだと思えますよ。私設の有料駐車場を造ってしまうと、まちの中にまで車が入ってきますし、それを生業にする人が出てきて、あとで禁止することが難しくなってきますからね。こうした取り組みが「石見銀山方式パーク&ライド」の社会実験につながっていています。

石見銀山のある大森というところは昔からまちづくりが盛んですが、最初からみんなが世界遺産登録に賛成だったわけではありません。というのは、大森のファンとなって通ってきているお客さんたちを大事にしてきた一部の地元の人たちは、にわかに押し寄せる観光客によってまちが変化することを懸念していました。しかし世界遺産登録ということが避けて通れないのであれば、ちゃんと話し合いをして受け入れ態勢を整えていこうと、市が仲立ちをして進めていきました。私は10年くらい前から個人的に地元とかかわってきましたが、世界遺産登録の話が出てからは「石見銀山協働会議」のアドバイザーになっていきます。

実際、世界遺産になったことで予想以上の観光客が訪れています。15分ごとに走るバスの振動や、ピーク時は1時間以上の駐車場待ちの列ができるなど、さまざまな問題が出て地元は試行錯誤していますが、全体としては、観光客を迎える体制が徐々によくなってきています。

## 都心で復元される歴史的建造物

### 「特例容積率適用区域制度」で変わる東京駅周辺

最近になって、赤レンガの東京駅や三菱一号館の復元が話題ですが、重要文化財となった明治生命館など、もともと丸の内には、残すべき高い質をもったものがたくさんありました。今までは、残すより壊すほうがはるかに多かったわけですが、少なくとも残す手立てや可能性のあるものは、やはり大事にしていなくてはいけません。幸いにして丸の内の道路の骨格は守られているの

で、建物は変わっても空間の構成は受け継いできている。それが大事です。せっかくあるものは生かしたほうがいい。東京駅がなぜ赤レンガかといえば、三菱一号館があったからです。馬場先通りの、かつて「一丁ロンドン」と呼ばれたオフィス街は、赤レンガの建物が連なっていた。だから辰野金吾も赤レンガで造ったわけ。古いものはみんな壊れてしまっ、今は東京駅しか残っていませんが、それもこのあたりの記憶のひとつなんです。建築だけの大事さだけでなく、地域の記憶としても大事です。

東京駅の復元(\*)は、もともと3階建てだったのが震災で2階建てに建て替えられているものを当初の姿に戻すということです(1914年建設、1947年修復)。これまでネックになっていた復元の費用は、使っていない空中の容積をほかに転移させて得られた収入を充てます。東京駅周辺の高層化は、そういうことで行われている。「特例容積率適用区域制度」といいますが、日本で面的に認められているのは2002年に指定された「大手町・丸の内・有楽町地区」(116.7ha)だけなんです。こうした制度は、もともとはアメリカのシカゴで生まれた「移転開発権」と呼ばれるもので、ニューヨークのグランドセントラル駅の保存で実施されました。日本でもこの制度を活用して、JR東日本は東京駅丸の内側の赤レンガ駅舎を戦前の3階建てに復原することを決めたのです。

ただし、こうした手法は、開発圧力のある大都市部でないとうまく機能しません。容積が足りないと思うから、ほかから買ってまで高い建物を建てようとする。ですから開発圧力の低い地方都市では利用できません。そこで登場したのが、今年施行される「歴史まちづくり法」です。

## 地域の歴史資産が生かせる

### 「歴史まちづくり法」

これまであった「景観法」というのは、ある種、規制強化の法律です。これから建てるものに対して規制をすることはできますが、朽ち果てつつある既存の建物を買い取って修復することに対する補助はなかった。ところが今年できた「歴史まちづくり法」は規制をするのではなく、歴史を生かす意味での緩和を認める法律です。例えば、これまで出店できなかったところに出店できるようになったり、修復などに補助金が出たりする。そ

\*編集部注：「復元」と「復元」の使い分けについて……本特集では、失われて消えてしまったものを旧に復することを「復元」とし、はじめの姿が改造・変化してしまった現状を、もとの姿に戻すことを「復原」として使い分けています。東京駅については「復原」を用いました。

の意味で、景観法が“ムチの法”だとすれば、歴史まちづくり法は“アメの法”といえるでしょう。「まちづくり交付金」などありますが、補助対象のメインはハード事業です。それ以外の復元のようなものは「提案事業」といって、ある予算の枠のなかでしかできなかった。それをメインの基幹事業として評価するというのが今回の「歴史まちづくり法」です。

こうした法が整ってくると、地方の特色をより出せるようになってくる。そうすると、新たに広域調整の問題が出てきます。郊外型ショッピングセンターに対する規制が強化されましたが、中心市街地と郊外だけでなく、さらに広域の発想が必要になると思います。

## まちの物語を読み解く

### 古地図片手にまちを見る

どのまちにも物語があります。そういうものを大事にしながら、住んでいる人が、ここに生まれてよかった、住んでいてよかったと思えるまちにしていく。「まちづくり」はそうでない意味がないですからね。魅力的な人が住んでいる、魅力的な祭りがある、素敵なお店がある、自慢できるものがあるなど、住んでいてエネルギーになるさまざまなことを丹念に掘り起こして、まちづくりの手がかりにする。「歴史」というのは、その中のかなりの部分を占めると思います。

歴史をまちづくりに生かす場合、どの時代でもいいかと思っています。特定の時代にこだわるとテーマパークのようになってしまい、それも不自然です。ある時代のものがしっかり残っているところはそういうやり方もありますが、大半のまちは、いろいろな時代のものが混在している。混在にこそ歴史の奥行きがあり、それぞれに異なる物語が内在していて、それも個性ととらえることができるでしょう。

古地図片手に実際にまちに入って、どうやってまちができてきたのか、なぜここに集落が立地したのか、地形との関係や、道の必然性などがわかってくると、まちは俄然おもしろくなります。当たり前と思っていたことに理由が見えてくる。まちの物語が見えてくる。われわれはフィジカルプランナーだから、まちづくりにあたって、そういうことを手がかりにし、意識的にまちを見る目を養っています。空間を読み解いていくにはそれなりのトレーニングが必要なのです。

## パブリックな視点

### 専門家に求められる資質とは

昨年は後藤新平の生誕150周年でしたが、彼は震災復興で東京をつくった人です。文京区から浅草にかけては、そのときにできた都市の骨格がそのままです。後藤新平がつくった都市が今まで生きているんです。すごいことですよ。彼は7年間で復興を成し遂げた。

後藤新平の時代とは違って、今日のまちづくりでは、みんなで少しずつなにかやっていく、というようなところが多い。都市計画の専門家は、合意形成を進めていくある種のファシリテーターの役割が強くなってきていますね。基本的には住民が決めるのですが、問題意識をもっていない人もいますから、ある程度意識づけをしながらかちも提案していく、というような仕事が多い。けっこう時間もかかるし、大変です。まちを再発見しておもしろいと思える人でないかだめですね。ですから、コンピュータでシミュレーションをやっているのが好きだというだけでは困ります。最終的に人の生活をよくするというがあるので、実感がもてるのが重要です。100人には100通りの生活があり、すべて体験することは不可能。しかし想像することはできます。ある種のイメージーションをもって、さまざまな人の生活をとらえ、その先を考える。それが、われわれ専門家に求められる資質といえるでしょう。

もうひとつ、まちづくりにとって「パブリックな視点」をもつというのはけっこう大事なんです。ルールを決めて高さを規制したりしますが、その場合、なんのために制限を課すのか。それが結果的にみんなのためになるんだ、と思えないと、わざわざ自由を拘束する必要はありません。海岸のゴミ拾いなんかもそうですよね。一人でゴミを拾うのは理不尽に思うけれど、みんなでやって海岸がきれいになれば、それに越したことはない。みんなのためになるということが信じられるから提案ができる。そういうセンスが大事だと思います。公共空間が自分のものと感じられるセンス。そういうことを感じるきっかけのひとつが「歴史」なのです。「歴史」は共有できませんからね。地域の歴史ですから、自分もみんなもそこに関係してくる。「歴史」は、これからのまちづくりにおいて、ますます重要な手がかりになっていくと思います。

WE

「歴史まちづくり法」とは平成20年5月23日に公布された「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」(法律第40号)の略称である。この法律は与野党のきびしい対決国会のなかで、衆議院、参議院ともに全会一致で成立した数少ない法律のひとつであり、それだけ社会からの期待は大きいといえる。

この法律は、国で古都保存法制定40周年を踏まえて、その理念と成果を全国展開するための政策を社会資本整備審議会歴史的風土部会で審議した成果である。平成20年1月25日、歴史的風土部会で決議された報告(決議を経て2月19日に答申となる)を踏まえて、平成20年1月29日、政府が閣議決定した「歴史まちづくり法案」は無修正で国会を通過した。法案審議と合わせて、歴史まちづくり推進のため税制改正が実現し、新法を踏まえた平成20年度予算も確定している。

歴史まちづくり法は文化庁、国土交通省、農林水産省が共管する法律である。全国各地の歴史的な都市、地域の市街地、集落、田園景観を保全・再生・継承するために、国が基本方針を策定し、市町村が策定した歴史的風致維持向上計画を国が認定。市町村が実施する重要文化財などと一体となった建造物の復原・再生、歴史的風致を活かしたまちなみの再生などの取り組みに対し、国が、文化財行政とまちづくり行政が連携して一体的に、手厚く、強力に支援することを目的としている。

歴史まちづくり法は次の点で、わが国の都市政策、まちづくり、文化財行政の転換となる画期的な法制度、政策である。

第一に、これまで開発と保存をめぐって対立する場面があった文化庁と国土交通省が手を握ったことである。また、集落、田園景観、水路の保全・再生のために農林水産省も協調した。地方自治体、特に小規模な地方都市にとっては、地元でまちづくりを実践する際、3つの中央官庁が連携したことの意義は大きい。

第二に、旧総理府と旧建設省が取り組み、現在は国土交通省が所管している古都保存法は、明日香、奈良、京都、鎌倉の乱開発を阻止し、文化財と一体となった山並みの保全と土地買い取りを実現した。しかし、古都保存行政の対象は飛鳥時代から室町時代までの朝廷、幕府の所在地に限定されており、国の支援は全国各地の歴史的都市には及んでいなかった。

第三に、全国各地の歴史的都市では高度成長、バブル期を経て市街地の町屋が急速に失われている。文

化財行政では重要伝統的建造物群保存地区の指定によりまちなみ保存が図られたが、その対象は地方の小都市が多く、開発圧力が強い地域では周囲でマンション建設など土地利用が乱れた。また、単体で保存された重要文化財の建物の周囲には歯抜けの空地が広がった。

第四に、平成16年制定の景観法により、地方自治体は景観まちづくりの推進のために法的規制と法定計画が可能となった。しかし、法的規制とルールのみではまちづくり推進は困難であり、国の財政・税制の支援が必要不可欠である。例えば、文化財の指定は受けていないが由緒のあるまちなみにおいて重要な建物が、廃業や相続のために土地建物が売却されようとした場合に、建物が取り壊され、跡地はマンションか商業ビルとなるのは必定である。地方自治体やNPOによる買い取りや保存活用を支援する国の財政・税制の仕組みは切望されてきた。

第五に、明治維新で解体され、戦災で焼失し、戦後の転売などにより取り壊された歴史的建造物の復原は、文化財行政では制度的にも予算的にも不可能である。これは国土交通省のまちづくり行政、特に歴史公園の整備、中心市街地活性化、良質な観光振興などの一環として、復原した建物の活用・維持管理の方策を含めて取り組まなければ、とうてい実現しない。

第六に、政令市のような大都市と地方の中小都市の格差に対する都市政策としての役割である。明治以降、わが国の都市政策には歴史と文化の観点は希薄であり、優先度はきわめて低かったが、それは経済発展のためにやむを得ない部分もあった。しかし、経済成長と単体住宅の水準をある程度は達成した今日、最も必要とされる都市政策であり、真に必要とされる地方都市に対する公共事業とは、歴史と文化を尊重した歴史まちづくりの推進である。これは地方都市に誇りとプライドを再発見し、再構築することでもあり、地方都市を支えている農業、漁業、地場産業、伝統工芸、祭り、自然環境を維持して、ひいては日本という国のブランド価値を高めることにもなる。

わが国の都市の多くは1600年前後に成立しており、約400年の歴史を有している。金沢、萩、高山、犬山、弘前、倉敷など著名な歴史都市に加えて、地方のきらりと光る宿場町、港町、漁村にいたるまでこの新法が契機となって歴史まちづくりの機運が高まることを期待したい。

WE

# 歴史まちづくり法とはなにか

文  
…  
越澤明  
北海道大学大学院教授

# 歴史と文化が積層した街・丸の内

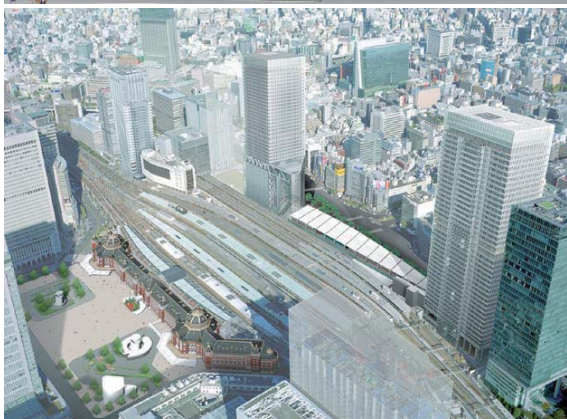


写真……シロバラタク

## 甦るふたつの赤レンガと新しいにぎわい

ビジネス街の代表格、丸の内。かつて馬場先通り沿いにはレンガ造りのビルが立ち並び、「一丁ロンドン」と呼ばれたこともある。1960年代の高度経済成長を背景に、それらのビルは取り壊され、近代的ビルに建て替えられたが、今、歴史を尊重した重層的なまちづくりを目指し、歴史ある建物の復元が試みられている。“赤レンガ”の愛称で親しまれている東京駅丸の内駅舎、丸の内のオフィスビル第一号である「三菱一号館」などを、現代の技術を駆使しながら復元し、まちの大切な記憶を継承するとともに、快適な都市空間創出の努力がなされている。





復原予想パース(2点とも)

## 創建当時の3階建てに「復原」される 東京駅丸の内駅舎

5年の工事期間を経て、平成23年(2011)に竣工予定の東京駅丸の内駅舎。創建当時の姿が甦り、“赤レンガ”の愛称で親しまれたこれまでの、駅、ホテル、ステーションギャラリーという機能をそのままに、まさに東京の顔が誕生する。ここでは駅舎復原までの経緯と意義について、JR東日本の広報部に聞いた。

語り・資料提供……JR東日本

——戦後、赤レンガの東京駅には何度か建て替え計画が持ち上がりましたが、取り壊されることなく今回の復原に至った歴史的な経緯をお教えてください。

JRへの民営化前より東京駅周辺については開発構想があり、丸の内駅舎に関しては、建て替えや高層化などが検討されましたが、昭和52年(1977)には日本建築学会より保存を求める要望書が出されました。

民営化後もさまざまな検討・調整が進められ、国や都などを交えた検討段階において駅舎の保存方針が示されるなか、再度、昭和62年(1987)に日本建築学会より保存を求める要望書が出されたり、

「赤レンガの東京駅を愛する市民の会」が発足したりと、保存を求める動きが活発化してきました。

そのような状況で、平成11年(1999)に石原東京都知事と弊社の松田社長(当時)が会談し、丸の内駅舎を創建当時の状態に復原することへの基本認識が一致したことをきっかけに、丸の内駅舎保存・復原の方針が固められました。その後、平成13年(2001)に東京都主催の「東京駅周辺の再生整備に関する検討委員会」が立ち上がりました。

弊社も検討を重ねた結果、社会的に日本の玄関口として注目される丸の内駅舎を保存・復原することで、首都東京の景観

形成に貢献し、歴史的建造物を恒久的に保存活用することによる社会貢献ができると考え、平成14年(2002)2月に石原都知事と弊社の大塚社長(当時)が会談し、八重洲開発も含めた東京駅の計画を発表しました。

これまで弊社は、東京駅を有効に活用しなければならないという立場と、丸の内駅舎の文化的価値を認識して保存・復原を行わなければならないという立場に立ち、さまざまな検討を重ねてきました。このような状況にあつて、丸の内側の余剰容積の活用を発端にした開発計画など、行政と民間が一体となり、東京駅の保存・復原が現実化したのです。

——戦災で失われた南北2つのドームや3階部分も修復されるそうですが、大正3年の創建当時の姿に復原されるということでしょうか？

外観およびドーム内観については、可能な限り創建当時の3階建てに復原します。内部については、創建当時の駅の駅ホテルとしての機能を維持するものの、民営化後に設置したステーションギャラリーを含め、現在の利用法を考慮しつつ施設計画を定めています。

例えば、復原工事に用いる化粧レンガの色合いについては、現在の駅舎の色合いなどを調査するとともに、新しい化粧レンガの暴露試験などを行って、可能な限り違和感のないようにする予定です。また、耐震については、地下躯体の上部に免震装置を設置し、免震構造とすることとしています。

——機能性や経済性を追求したこれまでの都市開発とは異なる動き、例えば今回のような歴史的な建築復原の意義についてお話しください。

丸の内地区では、歴史的な蓄積を生かしながら現代の商業・交流機能を拡張するなど、首都東京の中心にふさわしい風格ある都市空間の形成が進められており、そのなかでも平成15年(2003)5月に国の重要文化財に指定された東京駅丸の内駅舎は、中心的かつ象徴的役割を担っています。この丸の内駅舎を創建当時の姿に復原するとともに、現代の機能を拡張・充実させることで、将来にわたり、より魅力的・印象的な首都東京の顔としての整備に寄与すると考えております。 **WE**





# 変貌する丸の内界隈

## 三菱一号館の復元とまちづくり

パース資料提供……三菱地所株式会社

丸の内仲通り

### 丸の内の歴史と 復元への機運

丸の内は100年以上の歴史がある。「三菱ヶ原」と呼ばれたこの一帯は、諸大名の屋敷跡を、明治政府軍が仮の兵舎としていた。明治5年(1872)の大火で焼け野原になったあと、明治政府は兵舎を麻布に移転させることを決め、移転・新築費用の捻出のためにこの一帯を売却することになる。いくつかの財閥に声をかけるが、地代が高すぎてなかなか買い手が見つからなかったところ、明治23年(1890)、三菱社が一人で買い取ることに決まった。

三菱社には当時から、丸の内をオフィス街にしようという構想があったという。そして土地購入後、最初に建てられたオフィスビルが三菱一号館(明治27年(1894)竣工)である。建築家は、明治10年(1877)に来日し、工部省営繕局顧問をしていた英国出身のジョサイア・コンドル。彼は生涯をかけ、日本の近代建築の基礎を築いた。

その後、馬場先通り沿いには赤レンガのオフィスビルが徐々に建ち、「一丁ロンドン」と呼ばれるオフィス街へと成長していく。ビジネスセンター・丸の内の第一

期がこの時期で、その後、昭和30年代～40年代にかけて、高度経済成長を背景に8階、9階建ての近代的なビジネスセンターに変貌した第二期がある。そして平成10年(1998)から、超高層のオフィスビルへの建て替え、多機能な街を目指す第三期を迎えている。

そうした時期に、なぜ三菱一号館が復元されるのか。三菱地所株式会社広報部主事の服部創一氏にうかがった。

「平成10年から始まった丸の内再構築は、これまでのビジネス一辺倒から“多機能なまち”を目指すものです。今日、東京駅前には商業施設が充実し、土日も来街者であふれています。丸の内仲通り沿いにはかつて金融機関が入居していましたが、今ではブランドショップなどの路面店が軒を連ね、有楽町、銀座までつながる通りに変貌しました。平成10年からの10年間は丸の内再構築の第一ステージとし、「東京駅前に活気とにぎわいを創出」することをテーマに、丸ビル、新丸ビル、オアソ、東京ビル、信託ビルなど東京駅周辺において重点的に建て替えを進めてきました。そして、平成20年(2008)からの10年間は第二ステージと位置づけ、東京駅前に生み出された活気とにぎわいを、

大手町、丸の内、有楽町全域に波及させようとしています。商業機能は世間に認知されてきましたが、次のステップとして『文化、歴史』にも取り組むことになりました。文化発信拠点の中核施設となるのが三菱一号館です。これを復元し、美術館として利用する計画が現在進められています」

### さまざまな条件が そろって実現した復元

丸の内再構築の第二ステージのキーワードは「拡がり」と「深まり」だという。「拡がり」は大手町、有楽町を含めた面的な拡がりのこと。「深まり」は文化、芸術、歴史など、まちの魅力を深めていこうというものだ。三菱地所株式会社ビルアセット開発部主事の榊林康治氏は、まちが生き続けるためには、都市の記憶を感じさせるまちの深まりが必要だと語る。

「明治の建物を昭和40年代まで使い続けておりましたから、三菱一号館には会社としても思い入れがあったはずで、昭和43年の解体時には相当悩んだと思います。解体に際しては、近隣ビルの地下に設計図のほか、窓枠や床材など多くの部材を



上左●完成後は美術館として使用される三菱一号館内部の展示スペース  
上右●完成後の三菱一号館と丸の内パークビルディングの外観パース。昔、このあたりには31mという建物の高さ規制があったため、丸の内パークビルディングも、低層部と高層部の形状を違えて31mラインを表情線として残すことで、歴史の記憶を継承している。また低層部の一部には、再開発に際して解体した丸の内八重洲ビルの外壁の一部を再利用している  
下左●三菱一号館内に設けられたカフェのイメージ

の間に帯鉄という鉄の板を入れて補強をしていました。そういうところもすべて再現するようにしています」(榊林氏)

なるべく当時に忠実に再現しようとする意気込みが感じられる。一番の難問であった耐震については、建物の下に免震装置を設置することにより、十分な耐震性を確保した。

### 価値を高めながら 歴史を継承する

保存しました。その時点では将来復元することまで想定していたかどうかわかりませんが、貴重な社会資産だという当時の経営陣の思いがあったのだと思います。

その後、小泉政権のもとで『都市再生特別措置法』が成立。「文化、歴史」などの機能を導入した都市開発が都市の再生に貢献するものとして評価され、容積率の割増が得られる可能性が出てきたこともあり、第二ステージのコンセプト『深まり』を実現すべく、三菱一号館を復元することになりました」

こうして、丸の内発祥の象徴ともいえる三菱一号館が甦ることになったのだ。

### 材料にこだわった復元

復元に当たっては、歴史を尊重した重層的なまちづくり、都市の記憶の重要性の観点から、可能なかぎり忠実に復元することを目指している。

三菱一号館はレンガ積み構造で、全部で約230万個ものレンガが使用されていた。このレンガの復元に際しては、中国の工場で、ひとつひとつ型枠に土を詰めてプレス成型したものを窯で焼く、という昔ながらの製法を採用。その方法により、

オリジナルの風合いに近くなるという。

そのほかにも、基礎石から屋根のスレートまで、当時使われていた部材の石種、産地などを各種資料から調査し、できるかぎり同じものを調達すべく、各所を当たった。

「屋根のスレートに関しては、東京駅と同じ国内産のものを使っていたようですが、当時に比して現在の生産量が非常に少ないことから、今回、必要量すべての材料調達ができませんでした。各海外産のスレートの物性や色調などを入念に比較検討し、スペインから調達することにしました」と榊林氏は話す。

また、施工に当たっても、忠実な復元に最大限こだわっている。レンガは写真や立面図から「イギリス積み」であることがわかっているが、外部から見えないレンガがどのように積まれていたのかまでの設計図は残っていない。三菱地所設計の担当者は、どう積むべきか種々の資料を調査し、すべてのレンガの割り付け図を施工図として完成させたという。

「もちろん積むのも手作業なので、レンガ積み経験のある職人を日本中探し、技量試験を行ってその技量を確認しています。コンドルの設計では、レンガとレンガ

復元される三菱一号館は、三菱地所が直接運営する美術館として利用される。平成22年(2010)4月オープン予定で、建物が1890年代のものであることにちなみ、19世紀の西洋美術を中心とする近代美術に焦点を当てるといふ。丸の内の就業人口は約24万人。お昼休みや会社帰りの利用も十分に期待される。

「都市の記憶や思いは残さなければいけないでしょうが、やはり、まちには新しい価値を付加していく必要があると思います。しかも次世代にとってよりいいものにならなければならない。『日本工業倶楽部会館』は部分保存の事例ですが、建物自体の位置を少し動かすなどして、新築するオフィスビルとの一体感を創り出す工夫をしています。また『明治安田生命ビル』と『明治生命館』の街区は、重要文化財の全面的な保存と最新のオフィスビル開発をうまく融合させた例だと思います。このように、歴史を継承しつつも、利用者の利便性やまちとしての機能向上も実現していくことが大切ですね」(榊林氏)

丸の内エリアでは今後も、東銀ビルの建て替えをはじめとした、いくつかの再開発が予定されているという。丸の内の、歴史と文化の「拡がり」と「深まり」をもったまちづくりに、今後も注目していきたい。 **IN**





# 歴史 を生きる まちづくり

## 3つの歴史的な広場再生を通じた マカオのまちづくり

文……八木祐三郎（都市環境研究所研究員）  
写真提供……澳門民政總署

- 1887年から長い間、ポルトガルの統治下にあったマカオ。そのことでエキゾチックな街並みを有している。
- 1999年の中国返還後、老朽化していた歴史地区を修復し、散策できるまちづくりに取り組んだ。その歴史地区が
- 2005年に世界文化遺産に登録されことから、一気に観光都市へと変貌しつつあるマカオのまちづくりを紹介する。



幻想的な光があふれる夜のセナド広場



世界遺産登録された聖ポール天主堂跡

セナド広場の奥はショッピングアーケードになっている

### 2つの街のイメージ

マカオは、香港から高速フェリーで南西に1時間ほどの位置にある。マカオ半島（主要部）と2つの島（タイバ島、コロアン島）で構成されており、正式名称は、中華人民共和国マカオ特別行政区。面積は約28.6km<sup>2</sup>（東京都世田谷区の約半分）と非常にコンパクトだ。いま「マカオ」という名前を聞いて、多くの人はどのようなイメージをもつだろうか。予想するに「アジアのラスベガス」と「世界遺産」であろう。

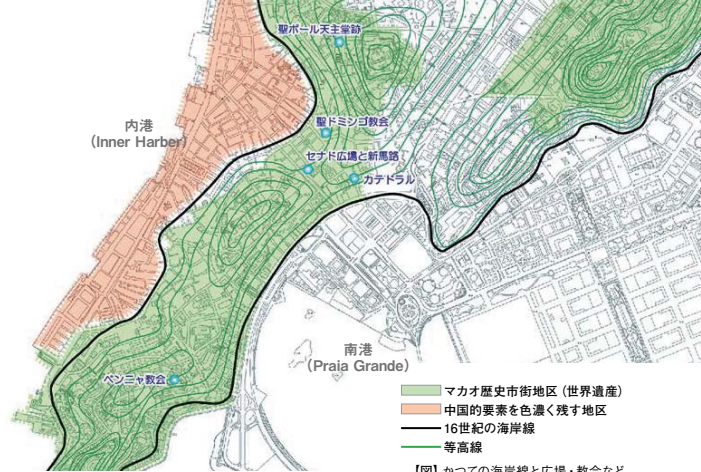
ひとつは「アジアのラスベガス」というイメージ。賭博自体は19世紀から存在しており、現在でも賭博の資金源として利用された質屋（今でいう銀行の役割を担っていた）が街の中に点在している。しかし、昨今のカジノブームに火がついたのは、中国本土からの個人旅行が解禁され、さらにカジノ経営権が外国企業に開放されたことが要因として挙げられている。

また、2006年にマカオのカジノ収入がラスベガスを超えたのは周知のとおりであり、特に、近年のマカオの建設ラッシュはすさまじい。タイバ島とコロアン島の間を埋め立て、そこにリゾート地「コタイ」（「コタイ」は2つの島の名前に由来している）が造られた。中国本土とつながっている半島側も、埋め立て地に数々のカジノが造られ、ここ数年で今までの街と風景を変えている。そうして現在、マカオは一大リゾート地として、アジアを越えて世界に名を馳せるに至ったのだ。

もうひとつは「世界遺産のマカオ」というイメージ。2005年7月に「マカオ歴史地区」としてユネスコの世界遺産に登録され、5年前は旅行雑誌でほとんど香港の裏に隠れていたマカオも、最近では旅行パンフレットの一面を飾ることが多くなった。

世界遺産に登録された「歴史地区」とは、8つの広場と22カ所の歴史的建築物およびその周辺（バッファゾーン）。多くは16～18世紀に建てられた街の中心部にある教会や修道院、廟などの宗教建築であり、なかには、城壁や広場など建築物ではないものも存在する。パンフレットでよく見かける聖ポール天主堂跡やセナド広場など、歴史地区にはポルトガル植民地時代の面影が色濃く残されているものが多い。それらは何も手を加えないままの状態に登録されたわけではなく、ファサードや内装などの修復を施して、かつての姿を取り戻したのも少なくない。一部には今現在も修復を続けているところがある。

15年ほど前、街の中心に位置する広場は、道路が敷かれたことで多くの車であふれ、歩行者が気軽に歩けるような場所ではなかった。広場によっては駐車場として利用されているところもあり、歴史的空間としての位置づけはなされていなかった。しかし、街の歴史を読み解き、街に点在する建築物・広場に歴史的価値を見いだしながら修復・再生を積み重ねてきたことが、今日の歴史地区としての世界遺産登録につながっている。特に、公共空間である広場の再生は、住民に憩いの場を提供しただけでなく、観光客が小規模なマカオの街を歩くのにちょうどいい休憩場所となっている。



【図】かつての海岸線と広場・教会など

### 歴史的な位置づけと 都市再生までの経緯

マカオは16世紀の大航海時代、ポルトガルが布教・貿易を目的に、中国（明朝）からの租借地としてこの地を開拓し、数々の教会、広場が建設された。教会は丘の上によく建てられ、それらをつなぐように尾根沿いに道が通り、ポルトガルに似た坂の街がこの地にもつくられたのである。教会はそれぞれ教派が異なり、布教による利益追求型の教派（聖ドミニコ教会など）は商業地から近い丘の裾（海側）に建てられ、象徴性を重視した教派は土地の高低差を利用して丘の上に建てられていることが多い。それらの教会の前には広場が造られ、そこは人々が憩い、宗教活動や商業に欠かせない場所となった。特に、ポルトガル統治時代からマカオの街の中心に位置していたセナド広場は、1784年に街の自治組織が行政の場として「LEAL SENADO（行政議会）」を広場前に建設したことから、街の中心地として、より明確に位置づけられた。

今は、埋め立てにより海岸線の位置が変わったため、広場は海から遠く離れているが、当時は多くの広場が海の近くにあったことがわかる【図】。海から貿易によってもたらされた物資が降ろされ、教会前の広場がその売買の場所としてにぎわっていた。その後、長い歴史のなかでマカオの海岸は、珠江から運ばれる土砂により徐々に埋め立てられ、海側の土地には華人街が造られた。華人街の発生は近

代のマカオの発展を支えるものであったが、ポルトガルがつくりあげた広場と港との関係を薄め、さらに、高密度に建てられた華人街の町家では多くの火災を招いた。それらを解決するため、ポルトガル海軍は大規模な埋め立て事業と都市改造（区画整理）を1850年ごろから行うようになる。

都市改造は、1910年、防災のための住環境の改善、商品運搬など交通機能の改善を目的に行われた。セナド広場と港（内港）を明確につなぐ新たな都市軸（新馬路（サンマロ））が通され、通りの先には内港沿いにある埠頭のなかでもひときわ大きいものが造られた。新馬路沿いにはアーケード付きのショッピングハウス（店舗併用住宅）が立ち並んでおり、その姿は今も残されている。

マカオは港を拠点に広がった街であり、広場は港との関係を近代に入ってもなお保とうとした経緯があることがわかる。このように、マカオにとって広場は単なる屋外空間ではなく、おのおの特徴・象徴性をもったものであったが、モータリゼーションや人口の高密度化などによって広場の内部に自動車を通り、人が主体の空間から自動車主体の空間へと変わってしまったのである。

### 3つの広場の再生

マカオの街の再生は、マカオ政府により、街の中心にあるセナド広場を皮切りに行われるようになる。再生される前のセナド広場は、広場の大部分が車道化されていて、道と道の間に大きな噴水が設置さ



左●波型模様の美しいモザイク舗装で新たに再生されたセナド広場 右●1994年当時のセナド広場

ほとんどだそう。

広場の大部分を占めていた噴水は新たに造り直され、噴水の中心には、かつてのスペインとポルトガルの勢力圏を示す境界線を描いた地球儀のオブジェが置かれている。さらに、車止めや街灯などのストリートファニチャーは、広場とその周辺の建築物の統一感を意識したクラシカルなデザインを採用している。

このようにして1994年、セナド広場は、祭事の空間、人々が集い憩う空間、観光客の集合場所として、マカオの中心地としての再生を遂げた。1999年には、新馬路側の歩道も舗装工事をし、セナド広場と新馬路の一体性がさらに強化された。そして、セナド広場再生の成功をきっかけに、次々とほかの広場も再生されることとなる。

### 時代考証を重視したカテドラル広場の再生

カテドラル(大堂)はマカオのなかでも宗教的意味合いが強い場所で、毎年、復活祭に行われるキリスト受難の行進はこの教会が起点となっている。また、徳川幕府の時代に殉教した長崎の日本人キリシタンの遺骨が安置されていたこともあり、日本人キリシタン迫害の歴史と関係の深い場所として知られている。こうした背景をもつていながら、カテドラル広場は1999年まで駐車場として利用されていた。広場を含めた周辺では、交通渋滞による衝突事故の増加や騒音と排気ガスによる環境汚染、また、歩行者空間の狭窄による自動車速度の増加など交通面での問題があり、それらを解決するため、広場の再生が行われた。

カテドラル広場でもコブルストーン舗装が施され、歩道と車道を明確に分離している。また、道路を緩やかなカーブに



左●再生後のカテドラル広場は、車が排除された落ち着きのある空間になっている 右●路上駐車で埋め尽くされた再生前のカテドラル広場 下(4点)●カテドラル広場の再生では、風水の観点から隅切りが行われ、西洋式の噴水が造られた



することでスピードの緩和を図っており、駐車場になっていた広場は、新たに噴水や椅子などを設け、中心商業地から一本裏側に入った穏やかな広場として住民に利用されている。

カテドラル広場の再生事業は、セナド広場再生後にすぐ行われているが、工事までの準備期間として5年もの歳月がかけられている。その歳月は歴史調査・研究や、専門家や建築家といった技術者、石材などの職人、周辺住民との協議に費やされており、再生事業の意味を認識しながら進められた。

広場のデザインについては、広場全体の統一のとれたデザインを目指しており、周辺住民の意見のなかにも「時間軸がバラバラなデザインは歴史的空間の統一感を壊してしまう」との懸念が挙げられている。特に、広場にあるモニュメントの

素材やデザインに重点が置かれているのがカテドラル広場の再生事業の特徴である。福建省出身の石職人が、16世紀後半に建設されたカテドラルや聖ポール天主堂跡などの工事を行っていることから、本事業のなかで、福建省の全州へ視察に行き、石材を使ったデザインや質、施工方法などを確認している(マカオに初めて定住した中国人が福建省全州出身の漁民であり、そこから福建省の職人たちがマカオに定住した)。これらのデザインは職人の積極的参加・発言によるところが大きく、広場におけるさまざまな彫刻などのディテールは、設計者が当初計画していたものから変更されている。

地元の職人の意見から、広場の角は風水の思想による隅切りが行われ、そこには西洋の噴水が置かれた。こうしたマカオ独自の文化の融合を残すことは、歴史

調査・研究の点でも重要項目として挙げられている。カテドラル広場を囲んでいる建築群(学校や司教の官邸)は、ポルトガルと中国の両方がベースとなった混合様式であることが明らかとなり、広場の再生にはポルトガルと中国の要素をともに残したものにすることになったのである。

### 広場として再生したタイバマーケット

タイバ島は小さな漁村しか存在しなかったが、19世紀後半から人口が増加し、1896年には1万2802人が島に定住していた(水上生活者含む)。その後、いくつかの公共施設が建てられたうちのひとつが、タイバマーケットだ。マーケットでは、魚介類や島で作られた農作物が売買されており、主にマカニーズ(ポルトガル人と、中国

れていた。広場のなかでありながら、一般的な公道として使用されており、建物沿いには多くの車が路上駐車をしていた。象徴性のある場所としての意識はあるように思えるが、人が生き生きと活動する広場の姿にはなっていなかった。

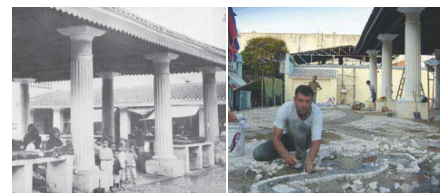
1990年前半、この「自動車主体」の空間を「人主体」の空間へ、新たに再生する計画が立てられた。整備目標は以下の4つである。

1. 歩行者にとって快適な空間、憩いの場を提供すること
2. 街に調和した伝統的材料を使用し、ランドスケープを意識したストリートファニチャーを使用すること
3. 国籍を問わず多くの人々に受け入れられる広場にする
4. 自動車による環境汚染や騒音を和らげる広場にする

この整備目標は、あとに続くほかの広場の再生でも採用されており、広場再生の重要項目となる。

### モザイク舗装で中心性を取り戻したセナド広場

新たに再生されたセナド広場には、うねうねとした美しい波型模様のモザイク舗装が施されている。これは海の波を表しており、この地が貿易港として開拓され発展したことを意識していることがわかる。この大胆な模様はセナド広場の重要な顔として存在し、広場の周りの建物と



左●広場として再生されたタイバマーケット 上左●マーケットとして活用された当時 上右●タイバマーケット再生のための舗装工事



上左●聖ポール天主堂跡からの眺め 上右●建物と道が整備され、車止めもクラシックなデザインに 下左●カテドラル広場付近 下右●聖オースティン広場

人などアジア圏の混血)によって利用されていた。建物は、ドリス式柱(西洋的要素)に中国式の切妻屋根(東洋的要素)が架けられているだけのシンプルな造りで、屋根の下には布が掛けられていたという。この場所は、迷宮的な路地を多くもつ街の玄関口であり、タイバ島の商業中心地としてにぎわうようになる。

しかし、徐々にマーケットとしての機能を失ったこの場所は、街の中心部に位置するにもかかわらず、倉庫や車の修理場として使われるようになり、周辺には壁が建てられた。マーケットのわきからは商店街が続いているが、壁が空間の連続性を遮断していた。この状況を、マカオ政府は問題としてとらえ、マーケットを公共空間の広場へと再生することを決めたのである。

マーケットの建物の修復と併せて、コブルストーンの舗装工事がここでも行われた。また、マーケット全体を覆っていた壁を壊し、見通しのいい広場として再

生されている。さらに、広場のモニュメントは龍の形をした低い壁で、龍のモチーフはタイバ島の昔の名前から得られているだけのシンプルな造りで、屋根の下には布が掛けられていたという。この場所は、迷宮的な路地を多くもつ街の玄関口であり、タイバ島の商業中心地としてにぎわうようになる。

### 広場再生からのスタート

広場の再生は、過去の用途をそのまま再現したものばかりではない。しかし、セナド広場、カテドラル広場、タイバマーケットの再生には、歩ける空間つくり、活動の拠点づくりなどの共通点があり、結果として、再生された場所だけでない、周辺を含めた再生事業になっている。その土地の意味・重要性を歴史から習い、現在の問題点・課題に対してどうすればいいかを、おのおのの場所に合った方法で解決していることが、広場のにぎわいを

甦らせている。現在もマカオでは、埋め立てなど都市開発が頻繁に行われており、ウォーターフロントではさまざまなカジノやホテルの建設が進んでいるが、世界遺産登録という一面ももっており、そのふたつがマカオの顔となっている。

しかし、世界遺産に登録された地区以外にも、マカオの街には魅了される場所が残されていることに気がつく。ヨーロッパ圏に多く見られる迷宮的街路・街区に、ケージを張り巡らせたアパートという空間構成は、マカオの街の中心地で多く見られ、西洋的要素と東洋的要素がミックスされたマカオのひとつの魅力である。また、都市改造で敷かれた新馬路や、海側に存在する華人街など、近代の発展を支えた場所も多く残っている。

今後、これらをどのように都市のなかで活用していくのだろうか。広場の再生は序章であり、マカオの街の再生はまだ始まったばかりかもしれない。 **WE**

## 歴史的広場再生の結果と課題



.....フランシスコ・ビゼウ・ピンheiro氏(談).....

マカオで多くの広場の再生を手がけたマカオ国際公開大学助教授のフランシスコ・ビゼウ・ピンheiro氏に、広場再生の意義についてうかがった。彼は、「街の保存・再生において3R(リニューアル、リハビリテーション、リバイバル)を場所によって使い分けることが重要である」と語る。(まとめ:八木祐三郎)

フランシスコ・ビゼウ・ピンheiro (Francisco Vizeu Pinheiro) 建築士。澳門国際公開大学助教授。澳門民政総署建築及設備部/高級技術員。東京工業大学博士課程修了(工学博士)。

### 広場再生による経済効果

それぞれの広場を再生する際に、反対意見も出ました。特にセナド広場では、広場の奥まで自動車を排除する計画でした。「車を排除することで店の売り上げが下がってしまうのではないか」「駐車スペースがなくなってしまう」「搬入搬出のアクセスはどうするのか」など地元(主に商業者)から強い反対がありました。しかし、広場の再生を行ったことで、周辺住民のためのフリースペースとなって人が集まり、さらに観光客もセナド広場を街の中心として認識し、結果として広場沿いの店舗には多くの客が集まるようになったのです。

不動産の観点では、再生を行った広場周辺の地価は再生前より50%上がり、場所によっては、それ以上の伸びを見せることもあります。広場再生を切に願ったマカオ政府、民間企業、周辺住民の結束・協力が広場再生(歩道化)を可能にし、結果として、周辺住民や商業者にとっていい効果を生み出したのです。しかし、すべての人にとっていい結果になったわけではなく、海外の量販店などの進出によって小さな商店が移転することになってしまったのは、少し残念に思っています。

### 歴史的建造物の保護と規制

街においてその場所がどのように使われていたか、また、建物はどのような用途で利

用されていたかなど、土地や建物の記憶・記録を保護することが、1992年に制定された法律で定められています。その法律により、歴史的建造物や城壁などの遺産はリスト化され、保護・規制がかけられましたが、その場所や建造物をどう再生するかのガイドラインがない状態で再生事業がスタートしました。ガイドラインがないため、遺産保護のプロジェクトごとにプロセスや取り組み方が異なっていますが、セナド広場再生を皮切りに、多くの広場再生は共通の重要整備項目をもつようになったのです。

再生事業のための調査結果として、過去に社会的重要性をもつなど意味合いの強い場所に対して、もう一度その意味づけをすることが街の再生に効果的だということがわかりました。つまり、再生とは、その土地がどのように利用されていたかを研究・調査し、その利用目的が継承・記憶されることが重要なのです。

また、再生の整備手法として重要なのは、過去にあった状態を100%そのまま整備するのではなく、過去にあった伝統的手法を生かすことです。カテドラル広場では、石職人による伝統的整備手法を用い、住民や行政、専門家などが手法の文化的背景や歴史イメージを共有することで、車道から歩道への空間利用としての広場再生に加えて、デザイン的要素の継承・記憶がなされています。

マカオは歴史地区として世界遺産に登録されたが、初めの登録申請を行ったとき、広場は世界遺産の指定箇所に入ってい

ませんでした。しかし、長い歴史のなかで活動の場として利用されていた広場が明確に再生・維持されていることをイコモスやユネスコの専門家が評価したこともあって、これらの広場は登録へと至ったのです。さらに、歴史地区の空間構成の基礎となっている歴史的建造物と街路・広場のネットワークが評価の対象となっています。

### 広場再生から今後の課題へ

街の文化的独自性を保つためには、単体の建物を保存するだけでは十分な結果は得られず、周辺の建物の外観などを含めた広いエリアでの再生が効果的だということがわかりました。また、過去10年間での再生事業を調査研究したところ、再生を行った場所と、そうでない場所(例:カモンエス広場、内港沿いの華人街など)の格差が激しく、人気の高さや観光的視点から見ても、再生していないところは価値が見いだされていないことがわかります。

現在、マカオ半島の広場の再生事業はほぼ終わり、タイバ島、コロアン島も10年間で完成しました。現在は、街のなかの一部で建築規制はかけられていますが、街全体のマスタープランやガイドラインがない状態なので、その作成に向けてマカオ政府として調査・研究を進めています。

今後は、再生されていないエリアを街全体のなかでどのように位置づけるかが課題となっています。



左●カテドラル広場の再生時に行われた住民説明会 中●華人街にある町家には今でも人が住んでいる 右●リニューアルされた民政総署

# 街なか再生を実現する メインストリートプログラム手法



文……大谷昌夫 (株式会社都市ふる計画事務所代表取締役)

## ■ 街なか衰退から生まれた再生手法 ■

紙幅上、都市の中心市街地をここでは「街なか」と呼ばせていただく。街なかの活性化については、中心市街地活性化法の改正をはじめとして、最近の都市再生の大きな課題となっている。20世紀の都市の拡大やモータリゼーションに伴い郊外に流出してしまった店舗や購買客をもう一度呼び戻し、寂れてしまった街なかを生き返らせる必要が全国の都市で唱えられているものの、それらの実績がなかなか見えてこない。

このような街なか衰退傾向は、グローバルな現象として指摘されており、欧米の諸都市でもさまざまな工夫が凝らされている。そのなかで、米国で開発されたメインストリートプログラム(以下MSP)という手法が、1980年以後の四半世紀の実績を有する先進事例として注目されている。

## ■ MSPは当然的手段のプログラム ■

MSPの内容を見ると、目からうろこというような画期的な要素が含まれているわけではなく、以下のような常識的な骨格で構成されている。

- ① 街なか活性化の実践は、街なかの脈脈として一定の限られた範囲のストリートにある。
- ② 再生活動には、中心となる専任マネージャーの存在が不可欠である。
- ③ 再生内容はストリートごとに異なり、多面に及ぶものの、取り上げる課題は組織、デザイン、プロモーション、経済再生の4ポイントに集約され、この4ポイントアプローチを包括的に実践することが成功の道である。
- ④ 地元の主体組織を構成するとともに、行政などの公的機関と連携した公民連携(Private Public Partnership, PPP)の構築を基本とする。
- ⑤ 成果は一時にはできず、最低3年以上の継続を全体にしてプログラムを組む。

これらの項目を熟視すると、どれも、実践に向かう活動においてはMSPに限らず有効なこととして認知できる。しかし、一方でMSPは、上記の要素の1つでも欠けることが、成功に至らなかった事例の原因と分析している。つまりMSPは、街

なかの再生活動に必要な事項について、それらを包括的に実行することを条件として、その実践手順を示唆したプログラムなのである。

## ■ MSPの法則 ■

MSPは1977年、経済的不振が続く当時の全米の街なか(ダウンタウン)において、伝統的な商業建築が衰退していく対策として、歴史保全ナショナルトラストがスタートさせている。その発端において、それぞれの街なかにある固有の歴史性を再生するためには、衰退した理由や健全保持を妨げる要因を研究し、いくつかのモデルストリートにおける実験を通じてプログラムをつくり上げている。

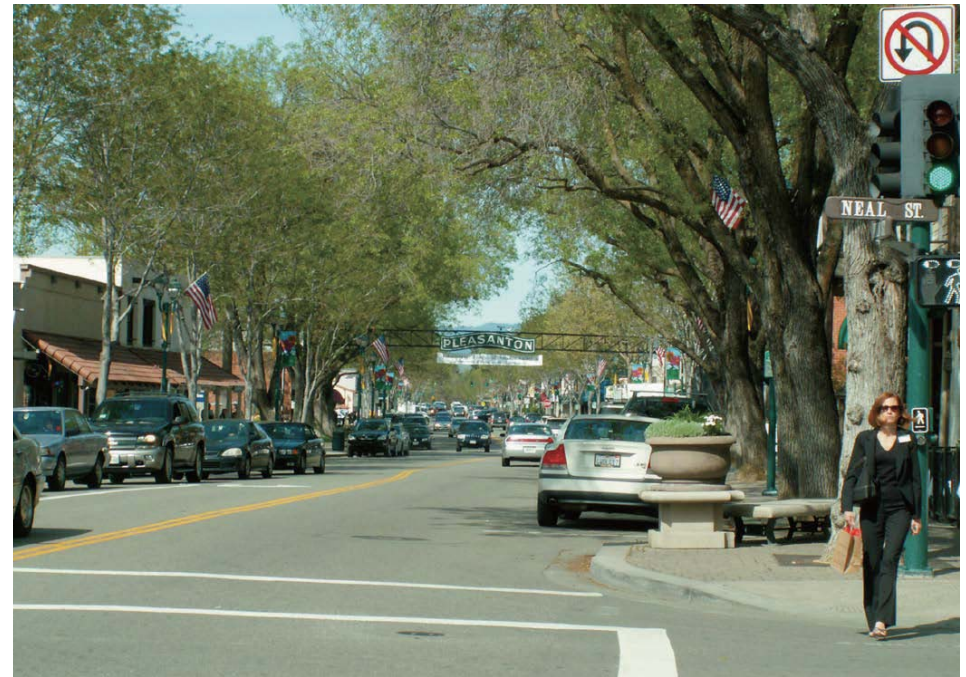
この過程において明確になった重要性は、強力な公民の連携、常勤マネージャーの設置、よいデザインや高品質を志向したプログラム、上手な推進プロセス、とされている。MSPとしては、街なかの歴史建築の保全のためには、街なか自体の再生による活性化が必要であることを示したのである。そのプログラムは、現在では全米で約2000のストリートに適用され、そのうちの6割のストリート組織が、歴史再生を根底においた活動を継続する成果を挙げている【表】。

## ■ MSPの進め方 ■

それぞれのMSP地区の特性によって差異があるはずであるが、おおむねMSPは以下のように進行する。

1. ストリート区域の人々により既存組織の一部あるいは新規組織としてMSP組織を構築する。行政による誘導など、すでにPPPが作用している例もあるはずである。
2. トラストに対してMSP認定手続きを行い、その規定に基づくマネージャーを募集・雇用する。
3. 採用されたマネージャーは役員会の運営を促し、その方針に基づいて必須4ポイントの部会【図】を運営。それらが打ち出した再生策の日常活動の実行に努める。
4. MSPの効果はいくつかの実行の積み重ねであることを前提にして、毎月・毎年の実行策の評価を行いつつ、長期プログラムに膨らませていく。

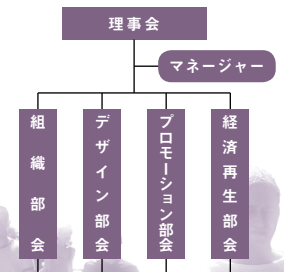
方法論として書き出せば以上であるが、どの地区でも課題



サンフランシスコ郊外のプレザントン市(人口6.8万人)では、市内唯一のメインストリート(約500m)において沿道環境整備を行った。公道の歩道部分を、沿道の店舗に有料で使用できるようにしたことで、カフェなどの楽しい空間が生まれた。これらのマネジメントをMS組織が行い、その手数料が組織収入になる。地元商工組織が専任マネージャーを雇い、市の職員も協力して取り組んでいた

【表】MSPの8法則

- 1 MSPは街なか活性化を図る包括的な推進策である。
- 2 MSPは歴史をはじめ地域ごとの特徴を増強する高い品質を反映するものである。
- 3 MSPの有意義・長期の活動のために、PPPが不可欠である。
- 4 MSPは街なかのよさを忘れていた人々の考えを変化させるものである。
- 5 MSPは地域の現存資源に焦点を当てて適応させるものである。
- 6 MSPは地域の主動力が発揮された自助プログラムである。
- 7 徐々に進行してきた衰退を改善に向けるMSPもゆっくりと進み膨らんでいく。
- 8 MSPは全体から細部までに計画的に方向づけられた実践プログラムである。



【図】MSPの構成

ボランティア



車道を狭くして駐車スペースや休憩スペースを設けている。リバモア（サンフランシスコ郊外、人口8万人）



2007年、シアトルで行われたカンファレンス風景。各地から参加者が集まって意見交換をする

となるのは、MSPの理念として掲げられている高品質と人々への訴求をどのように組み入れられるかである。先進他地区やショッピングセンターの模倣や、単なる新素材導入では、独自性は形成できない。ストリートの形状、店舗構成など地区特有の資源を生かすことに行き着く。それは、そのストリートが形成されてきた過去の経緯であり、沿道の建物や地形の歴史が色濃く反映されていることに着目することである。歴史的建造物などの資源があればそれを生かし、障害となっているものを改善していくのがMSPであり、言わば温故知新を提唱している。

■ 日本型街なか再生プログラムを目指して ■

MSPが米国で発展してきた背景には、四半世紀をまたぐ実践経緯ばかりでなく、ナショナルトラストという中間的な推進母体、地域限定課税と還元ができるBID制度（Business Improvement District）、州ごとの独自性などの米国事情が反映されており、他国へ伝播しつつある内容も、それぞれの国情を反映して実現されていくと考えられる。

それでは、わが国ではどのような街なか再生策が可能なのか。MSPを座右に置きながら日本型のプログラムを考えてみよう。

1. 街なか通りの集合体

中心市街地活性化法を基本とする中心市街地の概念は、数十ヘクタールに及ぶ都市の中心部を一体的な面として設定し、それらの総合的活性化策を基本計画として策定している。その面的区域には、線ともいべき商店街などの街なか組織が10や20程度含まれている。したがって、街なかはいくつもの通り（あるいは沿道組織）の集合によって構成されており、それらの個別の再生改善が膨らんでいくことによる街なか総体の再生方法が想起されるのである。つまり、街なかを通りの複合体としてとらえて、それら個々の改善を図る観点に基づくMSP的手法が有効と考えられるのである。

2. マネージャー雇用

通りの再生を図るために、日常的に通りの状況把握や再生活動を意図した専門役が存在できれば有効なことは自明である。しかし、その雇用には数百万円の年棒が数年必要となり、その捻出法を考え出さねばならず、一商店街の通常予算では全額はなかなか難しい。そのためには、まず行政からの補助あ



大谷昌夫（おたに まさお）

技術士・建築士・再開発プランナー。株式会社都市ぶろ計画事務所代表取締役。社団法人再開発コーディネーター協会理事・まちづくり支援特別委員長として「街なか（通り再生）プログラム」の開発に従事。

るいは人材提供などの支援策が望まれる。街なかのいくつかの再生すべき通りにそれだけのマネージャーが必要かという議論が予想されるが、同時的でなく一定の実行条件を備えた通りを1本ずつ、順次育成すればいい。もちろん、外部支援の前に自力で雇用できる底力を発揮できる通りがあることが理想ではあるが……。

3. 4要素の包括手法

現在、通り再生を試行しているモデル地区において、現地活動で論出される多様な活動課題を煮詰めていくとMSPの提唱する4つの課題に集約されるという実証を得ている。組織、デザイン、プロモーション、経済再生の4要素について、どこかに偏重することなく包括的に進行していけば、街なか再生の成果が見えてくることを示している。国情が異なっても、街なか再生の課題は共通性があり、MSPの30年の実績を信じて実行するかどうかにかかっている。

4. 実行前提の公民連携

街なか再生は、地元の都市環境の場面ばかりでなく、販売額や地価水準による税収や都市間競争までに及ぶ行政面からの重要課題を含んでいる。ゆえに中心市街地活性化法の活用の際に、基本計画の策定にとどまらず、それを実現につなげる血脈が街なかの通りの一つ一つであるという原則を基本におくことが必要と考えられる。やるか、やらないかの判断をするためには、人々が認識しやすいストリート単位の区域設定が有効である。そのため、地元との連携や支援を考えていくことが重要となる。

以上で紙幅は尽きたが、街なかが元気を取り戻すためには、そのためのプログラムが必要であることを強調したい。街なかには、それぞれが取り戻すべき歴史があり、その独自の価値を見つけることから未来への実践が始まる。歴史とは史跡ばかりでなく、ストリートの地中から上空まで、沿道の建物の軒先や出入り口、夕日の風景まで含めることもプログラムに必要な包括性能の一環であることも主張しておきたい。

再開発コーディネーター協会は、2004年から米国MSPカンファレンスや講座に参加し研究を重ね、自主事業として2007年度から「街なか通り再生プログラム事業」をスタートさせている。現時点ではモデル地区で試行中であり、これらの実証に基づきプログラムを進化させて、わが国の街なか再生に寄与しようと考えている。本項は、その推進を図る立場で関連資料の一端を参考しているが、文責は筆者にある。 **IN**

**建** 築家や都市計画の専門家とともに、主に外部環境をデザインするランドスケープアーキテクトという仕事。一般にはまだまだ知られていない専門分野である。土地を読み、その場の力を引き出して美しいデザインに表現する女性ランドスケープアーキテクト・上山良子氏は、数々の賞を受賞する優れた作家でありながら、2008年4月からは新潟県・長岡造形大学の学長に就任し、教育にも情熱を傾ける。

## ランドスケープの道を

### 選んだ理由

**三谷**——上山さんに最初にお会いしたのは、確か20年くらい前です。ちょうど上山さんがアメリカから日本に帰っていらしたころだと思います。留学したいけれどどうしようか迷っていた時期で、何か用があって東大にいらしていた上山さん

を香山壽夫先生から「三谷君、ランドスケープで有名な人が来てるから、お話を聞いたら?」と紹介されました。上山さんは、カリフォルニア大学パークレーキャンパスが素晴らしいことなどを話され、サンフランシスコでの生活もいいから、とにかくアメリカにいらっしょいと。

**上山**——まあ、そんなこと言ったの?

**三谷**——あのころ、工学部の建築学科で建築オタクでしたから、ランドスケープ

のラの字も知らない。恥ずかしながら、ローレンス・ハルプリン(注1)という人がどんな仕事をされているのかもぜんぜん知らなかった。とにかく当時の私は日本を飛び出すことしか考えていなくて、一応建築だったから、建築に志望を出そうと思っていた程度です。それが上山さんのお話を聞いたら、ランドスケープはすごく夢が多そうだと。あのとき、ぐっつと心が動いたんです。

そして、ランドスケープデザイン事務所として建築家に絶大な信頼があり、多忙を極めるオンサイト計画設計事務所のパートナーとして活躍し、千葉大学大学院園芸学研究科の准教授でもある三谷徹氏。いま最もホットなこのお二人に、ランドスケープアーキテクトの職能について、コラボレーションの必要性、教育の問題、歴史とデザインなど、さまざまなテーマで語っていただいた。

**上山**——じゃあ、結果としてよかったわね。

**三谷**——建築なのになんでランドスケープ?ってよく聞かれましたが、思えば、巡り合わせですよね。しかしその後、アメリカに行ってからショックを受けました。ランドスケープアーキテクトチャーは建築と似たようなものだと思っていたのに大違いで、森の中を歩かされたり、鳥の糞を数えさせられたり、毎週20も30も植物の学名を暗記させられたり。

**上山**——でもあのころはいい時期だったから、ハーバードでいい先生に巡り会ったでしょ。

**三谷**——いろんな人に会いましたよ。ピーター・ウォーカーのほか、ジョージ・ハーグリーブス、チップ・サリバン、マーサ・シュワルツもいました。彼らはまだ

まだ若手で、これから新しい世界を築いていこうとしている時代でした。

ところで、上山さんはどうしてこの道に入られたのでしょうか。

**上山**——若いとき、デザイナーを目指しているころ、特にスカンジナビアのデザインに非常に興味をもっていました。ところが親はデザインなんかするなど。英語なら学費を出すというので仕方なく上智大学に行ったのです。4年のとき、ドイツのウルム造形大学とアートセンターというのが両核にあって、絶対にそのどちらかへ行こうと、ドイツ語の勉強を始めた。市長を紹介されたりして、いざ行こうとなったら親のスネがなくなってしまうのね。その後もいろいろあるんですけど、スカンジナビア航空に偶然受かってしまった。どうしようかなと思ったの

ですが、2カ月間スウェーデンで講習があるので、それだけ受けたらやめよう。実際、空から地表を眺めると、すぐおもしろいじゃないですか。あれをデザインする人ってどういう分野なのかしらと漠然と思っていたんですよ。

とにかくデザイナーになりたいという気持ちから、その後、着地したのはインテリアでした。でも大地の雄大なデザインっていうのがずっと頭から離れなかったんです。

70年代のあるとき、京都の庭園を勉強しにカリフォルニアから来ていたロン・ハーマン(注2)に会う機会がありました。話をしているうちに、ランドスケープアーキテクトチャーっていうのはたぶん私の求めていた分野らしいとわかったんですよ。そして彼が、アメリカのランドスケ



# ランドスケープアーキテクトの職能を考える

上山良子氏  
対  
conversation  
談  
三谷徹氏  
写真……白石ちえこ

ブで有名な大学をいろいろ教えてくれました。それから2年後の1976年に、カリフォルニア大学バークレー校に入りました。大学院とはいえ、そのときの私は三十代前半で、同期はみんな10歳くらい若いわけ。でも体だけは丈夫なので、がんばることができた。最初は本当にこれでやっていけるか、見当もつかなかったの。ちょうどクリストが「ランニング・フェン



ス」(注3)をやっていたころのことです。

**三谷**——じゃあ、見に行かれたんですか？

**上山**——残念ながら、それはあとで知るところになるんだけど。同じ年の同じ9月、車に家財道具を全部積んで一人で、それまで働いていた口からバークレーに行った、ちょうどそのときだったんですよ。それがスタートでした。

**注1:** ローレンス・ハルプリン。1916年生まれ。アメリカのランドスケープアーキテクト。コーネル大学で植物学を専攻し、卒業後はウィスコンシン大学大学院園芸学科修士課程を修了。ハブニングダンサーである妻のアンナ・ハルプリンとともに、パブリック空間での利用者と相互関係に着目し、アメニティに配慮した公園や歩行者空間のデザインを行う。また、ワークショップをデザイン教育へ取り入れる試みを実践。

**注2:** ロン・ハーマン。1941年生まれ。アメリカのランドスケープアーキテクト。カリフォルニア大学バークレー校でガレット・エフボやローレンス・ハルプリンに学ぶ。学位取得後、京都大学で日本庭園の歴史を学び、英文版「京都庭園ガイド」をマーク・トライブと共に著す。彼のデザインアプローチは、日本庭園の設計手法に深い影響を受けているといわれる。

**注3:** 「ランニング・フェンス」は、北カリフォルニアの砂漠や農村を通り太平洋に至る40kmに、ナイロンの布でできたフェンスを横断させた、クリストのランドアート作品で1976年9月に完成。2週間公開された。

## 批評家の必要性

**三谷**——ロン・ハーマンは1970、80年代、「プロセス・アーキテクチャー」という雑誌に何度も記事を書いていますね。みんなけっこう読んで知ってるんです。あ

のところまだ若いマーク・トライブとか。

**上山**——マーク・トライブとロン・ハーマンは一緒に組んでいましたね。マーク・トライブのほうが批評家で、グラフィックでしたね。

**三谷**——彼はデザイナーというより批評家か歴史家でしょう。でもデザイナーの視点をもって歴史を見ている重要な人ですね。

**上山**——日本も批評家がいないとダメね。ランドスケープも批評家を育てないとダメだと思います。

**三谷**——上山さんに言われてひとつだけ守らなかったことがあるんです。アメリカから帰ったら上級公務員試験を受けて役人になって、私たちの活動の場をつくってちょうだいって言われたことです。

**上山**——そんなこと言ったの？ 勝手なことを言ってますね(笑)。でも役人もいなくちゃいけないし、批評家もいないとね、この分野は。

## 教育の問題

**三谷**——千葉大で教えて4、5年たちますが、卒業生が役所やあちこちに行っているのはいいことだと思うようになりました。それまでは一生涯デザイナーを育てなきゃと思っていましたが、設計演習を学んだ人が役所に行くので、それはいいですね。長岡造形大学に比べると本当につたない設計演習ですけど。

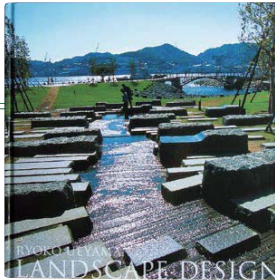
**上山**——長岡はけっこうやっていますよ。先生方ががんばるし。あるとき、急に学生の目がキラキラしますのね。あれは、われわれの醍醐味ですよ。どんな子でもやっぱり資源なんだってことをつくづく思う。小学校から自然と共生するカリキュラムを組んで、デザインの勉強が入ってくるだけでだいぶ違ってくると思います。そういう意味では、世の中を変えていかないういけないと思いますよね。

**三谷**——今の小中学校の教育で、特に中学校は園芸に力を入れているところがたくさんあります。園芸は情操教育にいいとか、自然を理解していいとか。しかし園芸に偏ってしまると、デザイン、空間づくりに結びつかないんですよ。みんな植物という素材で終わってしまう。それが

日本のランドスケープの流れにもそのまま反映されているような気がします。日本の特質かな。

**上山**——結局、園芸や植物はわかりやすいでしょ。デザインは自分たちの概念の中に入らないと思ってるのよね。うちの大学は先生をどんどん小学校に出しています。小学生をワークショップに連れ出して、この木はなんだと言いながら、ランドスケープをどうやってつくっていくかを教える。そんなふうにしてやっていったらいいと思う。小学校から6年たったら大学でしょう？

私は上智大学のコミュニティカレッジでお母さんたちにもランドスケープデザインを教えています。これからのジェネレーションはそうなってくると思えますね。思い立ったときに気になっていた学問を勉強したいという普通の人たちがランドスケープを学んでくると、日本の風景もよくなると思うんですけど。



上山良子作品集「LANDSCAPE DESIGN——場を創る」(美術出版)

**三谷**——上山さんは教育や情報発信に相当時間を割いていらっしゃるんですね。

**上山**——私ね、マイナーの気持ちがわかるから、やれるんですよ。あとからこの分野に入っているという劣等感があったから、今があると思ってる。引きこもりの子も、引きこもったってことに意志があるじゃない。自分の判断があった。彼らにすごく重要なことを任せると、それが開花してぜんぜん違う人間になったりします。私自信が劣等感をもってたから彼らが理解できる。

三谷さんは最初、どういふふうになられるかと思ったけど、エリートのままシャープに上がって。雑誌「ブルー・タス」に



マーク・トライブ著  
三谷徹訳「モダンランドスケープアーキテクチャ」(鹿島出版会)

載っていたとき、それでいいんだって。ランドスケープアーキテクトのかっこいい若者として取り上げられていて、とっていいことだなと。

**三谷**——あれ、20年くらい前ですよ(笑)。

## 歴史のなかで息づくデザイン

**上山**——私がアメリカに行っている1978年に、ハルプリンが2度目のワークショップを特別講義としてやりました。ランドスケープから10人、建築から10人、他分野から10人の合計30人が参加したんですが、ラッキーなことに私もランドスケープの10人に入ることができた。4日間はシーランチの先生の別荘などに分散して泊まり、3日間はサンフランシスコで、周りの世界から完全に囲われた合宿でした。

そのときに体験したいろいろなスコアがおもしろかった。例えば「あなたの死に場所」を見つけて下さい。ここで死ぬっていうスペースを30分で割りなさい」って言われる。それで最後の1分でプレゼンテーションする。また、「そこで『生きるっていう場所』を見つけて下さい」っていうのもあって、その2つがいちばん印象的なんですけどね。

そのワークショップのときに「場所がもっている資源をどうえ、その場にふさわしい場所をつくる」というランドスケープの定義を体で感じて、目からうろこが落ちた気がしました。これでやっていけるんじゃないかって思ったんです。この分野は素晴らしいなって。ハルプリンという人はデザイナーだけれども、教育者として立派でした。それはもう今でも感謝しているんです。

**三谷**——私はこの前、『モダンランドスケープアーキテクチャ』(鹿島出版会)というマーク・トライブの本を翻訳したのですが、マークは空間論や作品論を展開しているから、ハルプリンの活動を歴史のなかはどう組み込んでいくか難しいと言っていました。でもいつかやらなきゃ、と。

**上山**——そうですね、ぜひやってほしいですね。最近、私の作品集を渡しにハルプリンを訪ねたとき、自分はこれから活動を縮小して、本を書きつけて言っていました。今までの資料は全部とってあるからと。でも90歳。大丈夫かなあ。お元気そうでしたけど。

**三谷**——ハルプリンについては、もっと日本の若者に読んでもらいたいと思っています。上山さんの職能のあり方やものづくりは、人が中心になっていますよね。これもハルプリンの影響ででしょうか。

千葉大の園芸は自然科学系で、DNAや細胞がどうという話が多い。でも結局、環境をコントロールしたり何か作ったりするのは人だから、最終的には人だ、というの気がつくのに2年くらいかかる。

**上山**——私たちは人がどう感じるか、快適性を場にどう割り込んでいけるかっていうことですものね。そこがランドアートと違うところだと思います。ランドスケープは人を読めなかつたら絶対ダメだし、場を読めなかつたらダメだし、それともひとつ、時代を読めないとかダメじゃないかな。今の人がどうして歴史観が乏しいと思いませんか？

**三谷**——デザインの分野でも、歴史の教育がどんどん削られていますよね。歴史の研究は文学系に任せておけばいいんじゃないかって思っている人が、けっこう多い。



ジェフリー&スーザン・ジェリコー著「図説 景観の世界——人類による環境形成の軌跡」(彰国社)

**上山**——今の時代がこれまでの歴史のなかに存在するという、自分たちは連鎖のひとつだってことに気づけば、もうちょっといい社会になっていくと思うんですよ。

**三谷**——デザインは新しいことをするみたいと思ってる学生が多いんです。デザインは必ずしも科学のように発展するものではない。自分のデザインを自分で気がつかないといけないから、それはむしろ発見なんだと思う。実は100年も200年も昔に、自分と同じことを考え、同じことをやっていた人がいたと気づくと楽しい、時代から応援されている感じがもてるんです。

**上山**——コンテキストが違うっていうかね。それがおもしろい。その辺を気づかせていくと、非常にデリケートな子どもたちが出てくるんじゃないの。



**三谷**——そう思います。今は「現在からちょっと未来にどうするか」ばかり考えている。もっと過去からの大きく長い流れで、自然に前へ進むという、楽な気持ちが必要かもしれないですね。

**上山**——『デザイン・オブ・ラウンド』っていう教科書があって、ハーバードでもそうでしょうけど、みんなそれを読むのね。大地のデザインっていうことで有史以来の人の営みと風景の関係の歴史を学ぶ。それがすごいと思う。その感覚を皆さんがもってくるといいわね。特にランドスケープの学生たちは。

三谷さんの先輩の山田学さんが翻訳された『図説 景観の世界——人類による環境形成の軌跡』(ジェフリー&スーザン・ジェリコー著 彰国社)は、素晴らしい本よね。

**三谷**——あれ素晴らしい本ですから、学生に「買え」っていつもすすめるんです



薩摩藩上屋敷のあった場所の再開発では上山氏の土地を読むデザイン手法が読み取れる(芝さつまの道) 写真:石井雅彦

が、1万円だと今の学生は買わない。

**上山**——学生の変化はこの10年ですごくあると思うのよ。1期生というのは好奇心と想像力がいっぱいでした。なんでもやりたい、やりたいって。ところが最近の学生は好奇心のない子が多くなってきた。これは由々しきことで、好奇心と想像力がなくなったら人生おもしろくないですよね。人生の空間体験が少ないとボキャブラリーが乏しい。自分のバックグラウンドによって、もの見方や場の見方が違うけど、どんなに文化やDNAが違って、有無を言わず「これは素晴らしい」と思わせる場所がありますよね。そういうものをつくりたいといつも思っているんです。

**三谷**——実物を見ていない、実際の場所に行っていない若い人がいっぱいいる。驚いたのは、千葉大の庭園環境デザイン学研究室の大学院生の半分以上が、奈良にも飛鳥にも行ったことがないというんです。京都までは新幹線が通っているから行ってるんですけど。

**上山**——それは関連したプログラムを組んであげないとダメですよ。今の学生は、情報がありすぎるから逆に行かない

のかもしれない。私の時代はぜんぜん情報がないから、初めて行く感動から始まる。今の人たちは、ああ、ここはテレビでやってたところだ、から始まるから、かわいそうなのかも。

**三谷**——上山さんの時代には『地球の歩き方』のようなガイドブックもなかったから、そこに行き着くまでの紆余曲折というか、行くまでの苦労があって感動がある。そのときガッツリ感動しておけば、あとでその使い勝手というか、それが自分のデザインに生かされる価値は大きい。

**上山**——体験から得たものを伝えていくほうが、聞くほうも聞く耳をもつよね。

### 時空を超えて感動する風景

**三谷**——原風景というと、子供時代の田舎がどうだったという話になりがちですが、自分の職業としては、アースワークを見て歩いたことが突破口になりました。上山さんが飛行機から大地を見て思ったのと近い。

**上山**——私の原風景はアメリカのデスバレーなんですよ。イー・フー・トゥアンが『トポフィリア』という本の日本版の序

文に書いていたのですが、テントも持たずにデスバレーに着き、そのまま寝た。翌朝起きてみたら、静寂の大地にキラキラと光が当たっている風景だった、と。それは私とまったく同じ体験で、25年前にイー・フー・トゥアンが見ていたんですね。その風景に鳥肌が立つくらい感動して、これが風景の原点だと思った。彼の書いた本にすごく感動するのは、やっぱり同じところに感動するからかしらね。

**三谷**——大きな歴史的建造物を見に行ったとき、自分も感動しているけれど、周りの人たちも感動しているのがわかる。何百年にわたって何億人という人を感動させ続けたんだと思うと、そんなものを一生に一度でいいからつくってみたいと思いますよね。今の評価も大事ですけど、本当は何百年かあとの人に語りかけることができたら、これほど至極のことはないかと。

### 求められる

### コラボレーション能力

**上山**——自分の強さを徹底的に強くするのはアメリカのやり方です。いわゆる全



建築家・横文彦氏とコラボレーションした、三谷徹氏のランドスケープデザイン作品(鳥根県立古代出雲歴史博物館) 写真:編集部

部できるっていう人よりは、デザインに特化してる。植物に詳しい、そういう人たちのほうが一流事務所では喜ばれますよね。それでコラボレーションする。どうやってコラボレーションしていくかってことを学生のうちから教えたほうがいいわね。

**三谷**——今、そういうチームでやるのが多くなっていますからね。大学と地域もかなり密接になっています。ただ、建築みたいのに、歴史、施工、構造、設備、計画・意匠と五本足くらいでしっかり立っているような感じにならない。だからコラボレーションといっても、ランドスケープの学生はなかなか難しいと思います。

**上山**——だから、総合大学のなかにランドスケープが入るといいんですよ。そのなかでいろんなものを教えていければ理想でしょう、カリキュラムの組み方としては。

**三谷**——千葉大の緑地環境学科の先生たちがお互いにどんなことをやっているか、やっとわかってきた。学生が、植物もやるし、生態学もやるし、土木もやるし、デザインや計画もやる。けれどもまだまだ研究室ごとの仕切りが厚くて、研究室に

入るとバラバラのことやっているとこの感覚があります。

**上山**——大きな大学でできることってあると思うので、がんばってほしいわね。

### これからの10年に何をするか

**三谷**——次の10年に何をするかというのは、実はあまり見えてないんです。つくるのに精いっぱいというか。

**上山**——つくるのが楽しくてしょうがないとか？

**三谷**——いま楽しいのは「庭」の再解釈です。庭園デザインの研究室にいますので、日本の庭園を見る機会が多くなりました。毎年、学生を引率して京都に1週間くらい行って庭掃除したり、庭を管理している人に話を聞いたり。庭はけっこうおもしろいなと思っています。

われわれは、自然環境、生態学も取り入れたランドスケープという教育を受けていて、近代以降のいわゆる庭師の仕事にあまり接触していません。日本に『庭』という雑誌がありますが、その世界もランドスケープとの交流がそんなにない。有名な日本庭園のように歴史的に価値があ

るのも大事ですが、農家の庭とか、人がさりげなくつくって使っている庭にも、すごく興味があります。これからはそういう研究もしてみたいと思っています。

**上山**——私はもう人生の最終章なんですよ。最終章にたまたま学長という職務を任せられ、教育に戻る形になったので、この最終章は「教育」って考えてるのね。「地域」と「エコロジー」と「生命」の3つを重ねて、それをうちの大学、私自身も含めて、デザインで解きたいと思っているの。そこで何が最終的に生まれていくかというところに興味があります。

特に私のいる越後という地域は、いいものがいっぱいあるのに、ちっとも世の中に出ていかないの。去年の建築のコンペで優秀と選ばれた7人のうち3人が長岡造形大学の学生でした。最優秀賞も同じ山下研究室の大学院の学生なのに、誰も知らない。地域に眠る原石を磨いて世界に出していきたいというのが私の夢ですね。生命っていうのは子どもとどらえてもらっていいと思うんです。世界に向けて越後っていう地域から、最先端を走れる人材を飛び立たせていきたいというのが私の課題かな。 **IEE**